

もり
森

むら
村

おさむ
修

学位の種類 博士(文学)

学位記番号 文博第34号

学位授与年月日 平成8年3月26日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程)
哲学専攻

学位論文題目 フッサール「普遍学」とその倫理的転回

論文審査委員 (主査)
教授 野家啓一 教授 岩田靖夫
教授 柏原啓一
教授 篠憲二

論文内容の要旨

フッサールは、彼の70歳記念祝賀会の挨拶の中で、「哲学は私の人生の使命(Beruf)であったのです。私は哲学しなければならなかったのです。そうしなければ私はこの世界で生きることができなかつたのです」と述べている。彼にとって、哲学は単に職業として選択されているだけでなく、「使命」として、その意味で「天職(Beruf)」として「課せられている」といってもよい。確かに、祝賀会の挨拶である以上、それなりに勘案されなければならない常識的な謙遜もあることは承知の上で、私はそこにフッサールの「哲学に対する態度」を読み取りたいと考えている。

19世紀末から20世紀初頭のフッサールが生きた時代を考えたとき、彼が遭遇した「ヨーロッパ諸学の危機」という現実、もしくは二度の世界大戦という事件によって挟まれた時期の現実、筆舌に尽くし難かつたはずである。その中で、フッサールが哲学を「使命・天職」として決意するということは、ある意味で、時代に対する一つの態度決定であり、姿勢であつたと考えて大過ないように思う。

したがって、フッサールが残した幾つかの哲学的著作は、彼の生きた時代に対する彼なりの「態度表明」であつたと考えられる。それ故、彼の哲学を「前現象学期」と「現象学期」に分類する、一般的に行われており、それなりの妥当性をもつ解釈は、彼の「生(生活・人生)[Leben]」と

いう契機を挿入することによって、もう一度改めて捉え直されねばならないと思う。そして、私はフッサール個人の「生」という契機を挿入することによって、フッサール哲学は歴史的な位置を獲得することができると考えている。

確かに、フッサールは、自らの哲学を含めて、哲学が歴史を越えて妥当し、国家を越える「超国家性 (Übernationalität)」を保持していると考えている節があり、そのように語ってさえいる。現象学研究者もまた、そのように考えがちである。しかし、私は、フッサール哲学 (現象学) を非歴史的な真理として語るべきではないし、そのようなものとして解釈すべきではないと考えている。思想史的に見ても、フッサール哲学は、既に原初に様々な哲学によって「媒介」されているのであり、その「媒介」なしには存在し得ない。したがって、われわれ後発者は、できる限り歴史的出来事の布置の中に、彼の哲学・思想を置き直すことが必要であり、そうすることによって、彼の思想が孕む歴史的限界を見極める必要があると思う。それは、結果的に、フッサールの「使命としての哲学」並びに彼の「生」という問題を現象学研究に持ち込むことによって、フッサール哲学全体を「歴史化する」ことを意味している。

それ故、本論文の第一の目的は、フッサールの生きた歴史的現実との関係の中で、現象学の「起源」を見出すこと、そして、その「起源」から、どのようにフッサール哲学 (現象学) が生成し、発展していったかということを確認することにある。しかも、その際に注意しなければならないのは、フッサールが当初の非歴史的・非実践的な「普遍学」を構想し、構築していたにも拘わらず、ある時期を境に、フッサールの哲学が急速に実践的な色彩を濃厚に漂わせ、それと同時に歴史的な問題に関与するようになっていったことである。

それでは、何故、フッサールの「普遍学」の構想が「実践的」な転回を示すようになったのか。そこで、本論文の第二の目的は、この問題を検討することに当てられる。われわれは、フッサール哲学 (現象学) が「普遍学」から「実践哲学」へと、しかも「フッサール自身にとっての実践哲学」へと転換していく様を、「普遍学の倫理的転回・展開」として特徴づけることを試みたい。また、転換の過程において重要な出来事が、第一次世界大戦とその戦後であるといつてよい。私見によれば、フッサール哲学 (現象学) が「倫理的転回・展開」を強いられたのは、まさに世界大戦の勃発と戦後の劣悪な状況であった。したがって、フッサール現象学の「倫理的転回・展開」を確認することによって、彼が同時代の歴史的出来事との関係の中で、彼の「使命としての哲学」そのものが、期せずして彼が生きた現実との「対決」の記録として書かれ、ひいては現実に対する倫理的態度そのものを表現しているということが理解されよう。それ故、フッサール哲学 (現象学) とは、いひすぎを恐れずにいえば、一つの「実践哲学」であり、「フッサールにしか妥当し得ない実践哲学」であり、「フッサールにしか妥当し得ない生の哲学」である。

ただ、フッサールの哲学的著作そのものが、現実に対する態度の表明であるとき、それを読解し、解釈するわれわれもまた、歴史的現在における状況に対する「態度の取り方」を問われていることも忘れるべきではない。フッサールがヨーロッパ中心主義的な態度を最後まで堅持し、その純粋性を哲学に見出す一方で、彼自身が1923-24年に日本の雑誌『改造』に寄稿したという事実があるとき、非ヨーロッパに属し、非ヨーロッパ人であるわれわれは、如何なる形でフッサール哲学を受容しうるのであるのか、受容しなければならぬのかという問いに対する態度の取り方も同時に問われている。それ故、「日本における西洋哲学の受容」という問題を暗示することが、本論文の隠された動機で

あることも付け加えておきたい。

以上のような主旨のもとに本論文は書かれている。それでは、以下に本論文の構成を概略的に述べることにする。

本論文は、第1部「フッサールの前期哲学」、第2部「フッサールの『知覚の現象学』」、第3部「フッサールの『実践哲学』」から成る。これらの間には、ごく大まかな歴史的順序が「縦糸」として貫かれており、時系列に沿った形で、フッサールの研究史と彼の哲学との関係が述べられている。歴史的に叙述することによって意図されているのは、フッサールの「普遍学」構想を軸にし、現象学が構築される直前の「心理学主義的哲学」に基礎をもつ「数学の哲学」から、現象学を経由し、更に当時の時代状況の中で、現象学そのものが倫理的・実践哲学的に変質していく様子を、時代の流れと共に、フッサール哲学の変化を際立たせたかったからである。

「フッサールの前期哲学」と題された第1部においては、フッサールが生きた現実的な時代状況の中で、彼が如何にして数学から哲学に転向し、哲学的な考察の出発点として「数学の哲学」を選んだかという経緯を探ることが目指されている。後年、現象学を構築した後も、現象学そのものを貫くフッサールの「普遍学」構想が、数学的な形式性を重視する側面を保持していた理由の一端が指摘される。そこでは、フッサール哲学が、その最初から、数学に対する哲学的態度に拘束されていることが確認される。更に、この時期、フッサールに圧倒的な影響を与えたフランツ・布伦ターノの心理学・哲学との関係が検討され、フッサールが、布伦ターノから現象学の屋台骨ともいえる「志向性」概念をどのように継承したか、どのように改変したかが語られる。それ故、フッサールの前期哲学を論ずる上で、数学と布伦ターノ心理学は欠かすことのできない要因であるといえよう。

先ず第1章「数学者フッサールの時代」においては、19世紀末の時代の中で、フッサールが二人の師数学者ヴァイアシュトラスと布伦ターノの影響を受けながら、自らの哲学を構築する過程を、数学界の動向（「算術化運動」）と心理学主義的思想潮流に照らして考察する。そこでは、二人の師から、フッサール哲学を根底で支える、学問に対する姿勢あるいは精神的な態度の取り方を学んだことが確認される。次に、第2章「布伦ターノの『志向性』論」では、布伦ターノの「志向性」概念について、歴史的に検討される。そこで試みられているのは、布伦ターノの「志向性」概念の獲得過程を、彼が影響されたアリストテレス、トマス・アクィナス等の先哲の思想との関連の中で捉え、「志向性」概念を、彼の心理学との関係の中に位置づけることである。そこから、引き続き、フッサールの「志向性」概念が布伦ターノのそれから何を学び、何を学ばなかったかを確認する。

第3章「フッサールの『記号』論」と第4章「フッサールの『多様体』論」においては、主に、フッサールの「数学の哲学」が取り上げられる。そして、これらの章において、フッサールの「普遍学」構想が、具体的には「数学の哲学」として開始されたことを証明すべく試みられており、第1部の中心となっている。第3章においては、フッサールの数学的記号に関する考察が孕む問題が検討される。その問題とは、数概念と数記号との優劣関係に帰着する問題である。というのも、直観によって与えられる本来的数概念と、記号によって間接的にしか与えられない非本来的数概念（数学的記号表象）との対比において、前者に優位性を認めるフッサールの考えが、結局のところ、フッサールの思惑どおりに行かないということである。つまり、数記号こそが本来的であって、直

観によって与えられる数概念は、数記号の特殊例に過ぎないのではないかという疑問が提起される。

そこから、フッサールによる「心理学主義的」に数概念を「基礎づける」試みは挫折を強いられ、論理的に基礎づける方向へと向かわざるを得なくなったと結論される。その結論から続けて、第4章においては、数記号の中でも、計算によってしか産出されず、記号によってしか表象されない「人工的産物」としての「虚数的なもの」が、もはや心理学主義的基礎づけの内部では、その存在の身分を保証できないことが取り上げられる。そこで、フッサールは数学的对象だけでなく、より広く形式的な存在者を包括する学問領域にまで考察範囲を広げざるを得なくなる。その結果、「多様体」概念が案出され、数字ばかりでなく、あらゆる形式的学問を包括する多様体概念によって、学問領域の個別性を越えて、単一の学問による基礎づけのプロジェクトの方向が予感される。それが「多様体論」であり、フッサールによって、学問形式を対象にする「学問論」として構築されることになる。これを機に、従来の「心理学主義的哲学」が放棄され、「現象学」が創始されることになる。

また、第4章との連関において、「補論」として、フッサールの「数学の哲学」に対する批判者ジャン・カヴァイエスの「科学認識論」が取り上げられる。現在フランスの一思想潮流である「科学認識論」の祖カヴァイエスは、フッサールの「数学の哲学」を現象学としてではなく、「科学認識論」として批判的に継承しつつ、独自の展開を見せている。それ故、カヴァイエスの哲学は、フッサールの「数学の哲学」の可能性を開く一つの試みであるといつてよい。それが「補論」として収録した理由である。

第5章「フッサールの『意味』論」では、それまでの「数学」から、対象領域を「形式的なもの一般」にまで広げられた「学問論としての純粋論理学」の枠内で、「記号と意味」の問題が取り上げられている。そこでは、数学的記号ではなく、言語記号と意味の関係が、コミュニケーションの場面において検討され、フッサールが、言語は思想を媒介する上で、「透明な媒体」として、その存在を誇示しないと考えていることが確認される。以上のように、第1部では、フッサールの「普遍学」構想が「数学の哲学」に起因することが、様々な問題を通じて検討される。

どちらかという第1部が外的な時代状況と、彼の研究史という外的要因をもとに、フッサール哲学を時代の中に位置づけることが心がけられているのに対して、第2部では、フッサール現象学の圏内における内在的考察が試みられている。特に、フッサール現象学にとって最重要な「志向的構成」の問題が、感覚、知覚、身体という主観的な側面から考察される。その際に、それらの諸概念がフッサールにとって、暗黙の前提になっていることが確認され、フッサール現象学の背後で陰伏的に機能していることが指摘される。特に、フッサールの「志向性」にとって、知覚の優位が絶対的なものであることが示される。

学問論としての「普遍学」構想との関係でいえば、感覚、知覚、身体の問題は現象学内部の個別問題であるので、学問の在り方全体を問題にする「普遍学」構想から見たとき、直接的な関係は薄い。これらの諸概念が主観性の圏内において問題にされることが注意される。というのも、フッサール現象学にとって、主観性の能力は揺るぎないものであり、主観性が「経験的＝超越論的二重体」であることが指摘されることによって、志向的構成の場面においても、主観性の働き（能作）が重要であること、したがって、そこから実践的な問題が意識の働き（志向性）において無視し得ないことが確認される。それは、結果的に、構成する主観であると同時に、構成される主観でもあ

という「人間の主観性のパラドックス」を招来してしまうことが指摘される。

第1章「感覚と知覚」では、フッサール現象学における「感覚」概念と「知覚」概念が検討される。まず、諸家によるフッサールの「感覚」概念に対する批判を含めて、フッサールの「感覚」概念が詳細に検討される。そこから、フッサール現象学における「感覚」概念の重要性が指摘されると共に、新しい「感覚」概念の定義が試みられる。第2章「知覚と現出」においては、知覚と、対象の現出がクローズ・アップされることによって、主観性と対象との第一次的な関係が知覚の「志向性」の働きによって成立していることが確認される。その際、知覚による「対象構成」と「対象の意味」の関係が詳述される。知覚によって与えられる現出が、様々な現出であるにも拘わらず、「同一の」対象の現出として統握される為には、意味による統一が必要であることが指摘され、フッサールにとって、「対象構成」とは、「意味賦与」に他ならないことが確認される。

第3章「キネステーゼ（運動感覚）と事物構成」では、客観的な三次元物体である事物を対象的に構成する際に、暗黙の内に機能している運動感覚が取り上げられる。それを、フッサールは「キネステーゼ的感覚」と呼ぶ。そして、それが感覚や知覚を背後で支え、身体における構成する感覚として非顕在的に機能していることが指摘される。また、キネステーゼ的感覚は、運動感覚として知覚に変化を与え、身体に局所化されることによって身体運動に伴う主観性の運動性として特徴づけられる。

第4章「キネステーゼ的感覚と身体構成」においては、今度は、客観的对象としての事物ではなく、主観的对象としての身体を、キネステーゼ的感覚の能動性に基づいて、如何に構成するかという問題が検討される。そしてまた、視覚と触覚との二重感覚による身体構成が検討され、更に、主観的な意味賦与による身体構成が、「構成される主観性」と「構成する主観性」が共に同一の主観であるというパラドックスを引き起こすことが問題にされる。その解消策として、「原事実」としての「私はある」という事実性が指摘され、現象学的反省の限界として、構成に先立って前提されていることが確認される。そこでは、「構成される主観」であると同時に「構成する主観」であるという「経験的＝超越論的二重体」としての自我が、「外界」との関係において、人格的自我として存在していることが検討される。

最後に「フッサールの構成論」と題された第5章では、志向性を改めて「構成」という観点から検討する。具体的には、志向性の機能の中に、「意味賦与的構成」と「創造的構成」の二重性を確認し、後者の中に「実践性」や「倫理性」の契機を見出す。それ故、志向性の分析を通じて、現象学そのものが実践的・倫理的に変様していく契機を模索することが試みられている。そして第5章が、現象学内部における「実践性」や「倫理性」の契機を指摘することによって、第3部との連結部に位置していることも付け加えておきたい。以上、第2部では、「普遍学」というフッサール哲学総体を問題にするのではなく、現象学そのものが「実践性」や「倫理性」を徐々に醸成していく過程の分析に当てられている。

第3部においては、「普遍学としての現象学」において、倫理学の基礎づけが取り上げられる。つまり、「普遍学」としてのフッサール現象学が、基礎づけられるべき学である倫理学をどのように自らの体系の中に組み込んでいくのかといった問題である。しかも、倫理学の基礎づけを遂行する際に、必然的に、フッサールは倫理的・文化哲学的諸問題に直面せざるを得なくなる。それには、当時の第一次世界大戦の現実が背景にあることが指摘される。また、フッサールが、1920年代

から徐々に自らの「使命としての哲学」を自覚しつつあったことが挙げられている。70歳記念祝賀会は、1929年に為されており、フッサールが、当時の時代との関係の中で哲学を構築していたことを如実に窺わせる。それ故、1920年代に至って、それまであまり自覚されていなかった「実践的」側面が表面化することで、現象学そのものが、より鮮明に実践的な側面を強調し始めることが確認される。それは、フッサールから見たとき、自らの「使命・天職」としての哲学が、現実の時代状況とどのように切り結んでいくかを確認することでもある。そして、倫理学を基礎づけることによって、必然的に倫理学的対象に関与しなければならなくなったフッサール現象学が、必然的に、「倫理学化」し、「政治哲学化」していくことが検討される。そこでは、フッサールが哲学に何を託したかが暗示されることになる。

先ず第1章「形式倫理学としての純粋倫理学」においては、ブレンターノの影響のもとに、フッサールが倫理学に向かった動機を批判的に検討し、彼独自の倫理学を構想する過程を確認する。その際に、フッサールが倫理学も形式的学科として捉え、その基礎づけを形式的普遍性において遂行しようとするのが論究される。そして、形式性において、倫理学と論理学との平行関係を認め、純粋論理学が「学問論」として諸学を基礎づける任務を与えられているのと同様に、「純粋倫理学」もまた、倫理学の基礎づけという任務を託されていることが指摘される。そして、「形式倫理学」を構築するにあたって、カントの形式倫理学が批判的に検討され、カント的定言命法をより形式的に徹底した、フッサールの定言命法が提起される。しかし、それが極度に形式的であるが故に、実質的な内実をもった人間の行為に対する行為規範になり得ていないことが確認される。この意味で、フッサール現象学における倫理学の限界が、「形式倫理学」に内在しているといえよう。それは、フッサールによれば、形式倫理学の限界であると同時に、「質料倫理学」の要請へと連関していきかけになっている。そこで、第2章「フッサールの『大正時代』」においては、『改造』論文の分析に当てられる。つまり、当時の第一次世界大戦とその戦後の混迷の中で、現象学が「学問の危機」や「人間性の危機」を克服するという確信が、『改造』論文において語られるのである。『改造』論文は、フッサールの質料倫理学に関する、唯一公刊された論文であり、形式倫理学に行き詰まりを見出したフッサールによって、実質的な倫理学的課題に対する現象学の寄与である。そこで、われわれは、『改造』論文から、彼の質料倫理学の骨格を描出し、フッサール倫理学の再構築を試みる。また、『改造』論文の現象学的考察の補完として、アーロイス・ロートの『フッサール倫理学研究』において論究された解釈と、フッサールの未刊の倫理学草稿をもとに、フッサールにおける質料倫理学を概観し、フッサール現象学における倫理学の基礎づけの過程を跡づけることが試みられている。

更に、『改造』論文からも指摘されることだが、フッサールによれば、質料倫理学に関する現象学的考察の意図は、倫理的な人間性の革新による新たな人間の生成であることを目指し、倫理的な人間による共同体の建設を意図している。これで、われわれは、フッサールが具体的な現実の中で、共同体の意義、国家の意義を問題にせざるを得なくなった背景のもとに、「フッサールの国家論」として取り上げ、彼にとっての共同体と国家の問題が、個人的な人間の主観性とどのような関係にあるのか、そこで期待と共に語られている国家や共同体とは如何なる種類のものであるかを検討する。そこでは、最後に、フッサールの「コスモポリタニズム」が抽出され、それと共に、フッサールの「コスモポリタニズム」がある特定のモデルを前提していることも一緒に指摘される。彼にとっ

ての理想とは、「ヨーロッパ」であり、世界のモデルとして、他の諸地域に対して圧倒的な優位にあることが指摘される。したがって、われわれは、彼の「ヨーロッパ」観が、彼の自覚・無自覚に拘わらず、極めて「政治的」色彩の濃いものであることを指摘する。そこから、われわれは、フッサール哲学（現象学）がある種の「政治性」を孕んでしまうことを指摘したい。

それ故、第3章を受けた、終章「フッサールの『ヨーロッパ』とその《外部》」においては、フッサールの「政治的無意識」として機能する、彼の「ヨーロッパ」観の分析に当てられる。「ヨーロッパ」を特権視するフッサールの前提には、ギリシャ哲学に対する極度の思い入れがあること、更に、ギリシャ哲学を精神的に継承しているのが、「ヨーロッパ文化」であること、そして「ヨーロッパ人」や「ヨーロッパ的人間性」に対する信頼が「ヨーロッパ精神」の不死性にあることが指摘される。そして、フッサールにとって「哲学」とは、理性の代名詞であり、彼が生きていく過程の中で、理性的であることを「努力」していくことが理性的になる過程であることが強調される。それは、「ヨーロッパ」以外の諸地域も、「ヨーロッパ化」されることが必然的であるというフッサールの指摘に直結していく。最後に、フッサールにとって、「ヨーロッパ」以外の諸地域の「ヨーロッパ化」とは歴史的必然であって、それが歴史的に意味のあることであるという前提によって為されていることが確認され、検討される。その結果、フッサールの「ヨーロッパ」観が、他の諸文化を否定し、「ヨーロッパ化」する必然性を確証する限りで、「非アリア人」を否定し、更に彼自身をもユダヤ人として排斥しようとするナチス・ドイツの政策と「政治的無意識のレヴェル」で精神的な同型性を担ってしまうのではないかということが指摘される。

そこから、フッサールの歴史的必然において「ヨーロッパ化」されなければならない日本に関連して、フッサールと同時代の哲学者西田幾多郎の文化観が、フッサールの「ヨーロッパ」観に対する対抗として触れられる。それは、われわれが現在においても問題にしなければならない「哲学という使命」を、フッサール共々共有しなければならないのか、という問題として、日本人の哲学者の使命を考える機縁を提供する筈のものである。以上のように、第3部は、「普遍学」構想が、第一次世界大戦以後、現実的な倫理的な内実をもたされることによって、それ自体倫理化していくプロセスの描出に当てられ、フッサールの「生」と哲学が密接不可分な形で融合していく様を見届けることが目指されている。それは、ある意味で、フッサールの政治性に光を当てることでもあった。

論文審査結果の要旨

本論文は、序章、第1部、第2部、第3部、終章の5部からなる。

序章「フッサールにおいて哲学とは何であったか」において、論者はフッサールの生涯を素描しながら、彼が創始した現象学を非歴史的な真理としてではなく、歴史的な文脈の中で理解し、解釈すべきことを主張する。その上で本論文全体の構成について述べ、自らの問題意識を鮮明に提示する。

第1部「フッサールの前期哲学」は5章および補論からなり、初期現象学の形成過程がフッサール自身の数字から哲学への転回の道程を通じて丹念に辿られている。フッサールは処女作『算術の哲学』において数概念の心理学的基礎づけを試みたが、その途上で直観には与えられず記号的にの

み表象される「虚数的なもの」の存在身分を心理学的に基礎づけることの困難に気づき、考察範囲を形式的な存在者全体を包括する学問領域にまで広げることを余儀なくされる。フッサールは「多様体」概念に訴えることによってその困難を回避し、同時に「現象学」への独自の道を歩み始める。数学のみならず、あらゆる形式的学問に適用される多様体概念は、学問一般の統一的基礎づけというフッサールの「普遍学」の構想に明確な基盤を与えるものであった。論者は以上の考察をフッサールのテキストの厳密な読解によって跡付け、さらに19世紀後半の数学状況を歴史的に概観することによって説得的に展開している。とりわけ「確定的多様体」の概念とヒルベルトの「完全性」概念との関わりについては、S. バシュラールやR. シュミットなど既存の研究を批判的に検討しながら論者独自の解釈が提示されており、この分野の研究に資するところ大である。

補論「ジャン・カヴァイエスの〈科学認識論〉研究」は、これまでの現象学研究の中ではほとんど取り上げられることのなかったフランスの数理哲学者カヴァイエスの数学思想をフッサール現象学との連関に焦点を合わせて論じたものである。フランスの「エピステモロジー」の伝統と現象学運動との密接な関わりに光を当てたことは、先行する研究が少ないことから、高く評価されてよい。

第2部「フッサールの〈知覚の現象学〉」は5章からなり、フッサール現象学の核心をなす「志向的構成」の問題が、感覚、知覚、身体といった主観的側面から解明されると共に、その背後で「知覚の優位」という暗黙の前提が機能していることが論じられる。まずフッサールの「感覚」概念に対する大森荘蔵など諸家の批判が取り上げられ、それらの批判が一面的なものにすぎないことが指摘されると同時に、感覚概念が「時間的構成」の問題と不可分であり、その観点から「ヒュレー的反省」の次元がもつ独自の意義が明らかにされる。次に、事物構成と身体構成の双方に関わる「キネステーゼ」の概念が詳細に分析され、そこから生起する「構成する主観」が「構成される主観」でもあるというパラドックスを通じて現象学的反省のもつ限界が示唆される。最後に、フッサールの志向性理論には「意味賦与的構成」と「創造的構成」という二重性が孕まれていることが指摘され、後者の中に「実践性」や「倫理性」の契機が見いだされることが第3部への伏線として確認される。以上の論述は、いずれもフッサールの原典および関連文献を的確に押さえた上で展開されており、十分に信頼できる主張となっている。とりわけ、現象学の構成理論そのものの中に実践哲学や倫理学に向かう萌芽を見いだしたことは、論者の独創に属するものと言ってよい。

第3部「フッサールの〈実践哲学〉」は3章からなり、本論文の中心的テーゼを形作る部分である。ここでは、あらゆる学問領域を統一的に基礎づける「普遍学」を目指してきたフッサール現象学が倫理学をどのように自らの体系の中に組み込みうるのかが論じられる。論者は公刊されたフッサールの遺稿を精査した上で、フッサールが倫理学の基礎づけを「形式倫理学」の構築をもって遂行しようと試み、カントの定言命法をさらに形式的に徹底化した定言命法を提起していたことを明らかにする。しかし、その極度の形式性のゆえに具体的な行為規範とはなりえないという形式倫理学の限界から、フッサールは「質料倫理学」を要請するに至る。その一步を踏み出したのが、1920年代に彼が『改造』に寄稿した二編の論文である。この『改造』論文に着目し、そこにフッサールの「質料倫理学」の構想を読み取ることによって現象学的倫理学の可能性を探り当てたことは、本論文の最も重要な貢献であり、現象学研究に疑いもなく新知見をもたらすものである。また、フッサールの「コスモポリタニズム」の理念とそれを基盤にした「国家論」の構想にまで説き及んでい

ることは、今後に残された課題であるとはいえ、論者の目配りの広さと着眼点の非凡さを示すものである。

終章「フッサールのヨーロッパとその〈外部〉」は、フッサールの「理性主義」が背後に潜ませている「政治的無意識」を「ヨーロッパ中心主義」として取り出すことによってその政治性を明らかにする。それと共に、フッサールの言説に同時代人である西田幾多郎の言説を対置し、非ヨーロッパ地域（日本）においてヨーロッパ起源の「哲学」という学問を遂行する意味を自らに問いかけて章を閉じる。この終章は哲学研究者としての論者自身の問題意識を色濃く反映させたものであり、わが国の哲学研究の現状に対する鋭い問題提起となっている。

総じて本論文は、フッサール現象学の初期から晩期までの展開過程を「普遍学」の構想という視角から読み解き、フッサールの思想を歴史的状況の中に位置づけることによって、重要な新事実・新知見を提示している。特に、これまで等閑視されていた倫理学の領域に踏み込んでその全体像を明らかにしたことは現象学研究の進展に大きく寄与するものである。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与される十分な資格を有するものと認められる。